典型集落・野尻にみる明治中期の家屋敷の状況と居住域の空間構成

－近江平野野洲川下流域における条里地割と平地集落の空間形成に関する研究 その2－

THE ARRANGEMENT OF THE FARMHOUSE IN THE MIDDLE MEIJI PERIOD,
THE SPATIAL COMPOSITION OF THE VILLAGE'S RESIDENTIAL AREA
ON THE TYPICAL SETTLEMENT－ Study on the land allotment of Jyori-grid system and the area formation of typical plain village
on the lower reaches of Yasu river in Oumi plain Part 2－

秦 憲志*, 桜井康宏**

Kazuyuki HATA and Yasuhiro SAKURAI

This study aims to clarify how the villages in the plain field on the lower reaches of Yasu River, Shiga Prefecture, had formed. Especially, the arrangement of the farmhouse in Nojiri Village in the middle Meiji period and the composition of the block based on the Jyori-grid system are focused. As the result, its relations on the road access to site and the location of waterway are decided, and the residential area is composed of some blocks, and the model scale is $1/2 \times 1$ "cho", and the uniformity is composed of the sites where the farmhouse is regularly located.

Keywords: Oumi plain, Village, Area formation, Land allotment of Jyori-grid system, Arrangement of farmhouse, Meiji period

近江平野, 集落, 空間形成, 条里地割, 家屋敷, 明治期

1. はじめに

本研究は、近江平野の中でも条里地割が卓越し、その遺構が今日までよく残っている滋賀県野洲川下流域、旧栗太郡北東部地域を対象として、条里地割による平地集落の空間構造とその形成原理を明らかにするものであり、その第1段階として、前稿では、明治・大正期の地域空間の姿を復元し、地域空間の骨格を形成する基となっている条里地割と用水との関係を軸にして、集落と居住域の立地特性及び居住域形成の原理を考察した^{注1)}。

第2段階として本稿では、一つの典型集落を対象として明治期の姿を再現し、家屋敷の特性と居住域のブロック割^{注2)}の特性を分析することによって、集落居住域の構成原理を考察し、条里地割を踏襲する平地集落の集住のしくみを考察する^{注3)}。

これまで集落の空間研究や空間計画の分野では、現状認識を深めるための認識仮説モデルや計画目標として示される計画モデルなど、集落空間のモデル化が数多く試みられている^{注4)}。しかし平地集落については、「散居」とされる砺波平野の村落について、住居・屋敷・村落の体系的な対応関係を分析し、個と集合のしくみとして、その構成原理を解明した研究^{注5)}や筑波市において接道条件と屋敷の空間構成（屋敷構え）の特性について考察し、屋敷配置に軸を置きながら集落の空間構造を解明している研究^{注6)}などがあるが、限られており、また条里地割との関係で集落の空間形成のあり方や空間構造を解明しようとする研究は充分に行われていない^{注7)}。

なお、集落の居住域形成の時期について、歴史学や地理学等の分野では、畿内各地において今日見られるような集約した村落景観の基礎が形成されるのは、荘園制が変容し、村落の再編が行われる13世紀から14世紀頃と言われている^{注8)}。この地域の発掘調査からも、15世紀頃に、散在していた屋敷地が現在の集村の居住域に移行している様子が報告されている^{注9)}。中世後期に、村落の自衛や灌漑用水、入会地の管理などを目的に、自治的村落共同体・惣村が形成され^{注10)}、村人自らが居住空間を形づくる基盤が整っていったことも大きな要因になっていると考えられる。しかしながら、この地域の集落が、どのようにして、このようなまとまりのある居住域を形成するに至ったかについては、確かな史料が残されていないため明らかになっていない。そこで本稿では、村絵図・地籍図等の資料によって時代を遡って空間的特質が把握できる明治期の集落の姿を復元し、空間の枠組みを形づくるしくみを検討することで、空間構成の原理を類推することとする。

2. 研究の目的と方法

本研究は、平地集落の構成原理を、典型集落の明治期の姿を再現し、家屋敷と道路・水路との関係及び居住域のブロック割の特性を分析することによって、家屋敷とブロックの二つの視点から基本単位を構造化するしくみとして明らかにしようとするものであり、その中で、条里地割が集落居住域の形成にどのように関係しているか

* 滋賀県立大学地域づくり教育研究センター

専門調査研究員・工修

** 福井大学大学院工学研究科建築建設工学専攻 教授・工博

Research Specialist, Regional Development Education Research Center, Univ. of Shiga Pref., M. Eng.

Prof., Architecture and Civil Eng. Course, Graduate School of Eng., Fukui Univ., Dr. Eng.

を考察する。

研究の方法は、明治大正期の資料を用いて、近代化による大きな環境変化が起こる前の地域空間の姿を明らかにする。対象地域は、前稿と同じ滋賀県野洲川下流域、旧栗太郡北東部地域であり、典型集落としては、規模と集落の形状、居住域の形態、資料の有無を考慮して前稿で選定した8集落^{注11)}の中から野尻集落を取上げた。野尻集落は、その形状が6町×6町の正方形に近く、居住域の大きさが2町弱四方、戸数42戸と、条里地割を踏襲する平地集落の一つの典型例^{注12)}であり、なおかつ、明治期の連合戸長役場制度の時代(明治18年4月～22年3月)における家屋敷の状況がわかる図面、屋敷図^{注13)}が存在する。この屋敷図資料を利用して、現地調査とヒアリングにより、典型集落・野尻の明治20年(1887)前後の集落居住域の姿を復元する。

この典型集落の考察に先立って、本研究では、よりシンプルな集落形態をとっている苅原の空間構成の分析を行い、条里地割に規定され、どのようにして居住域が形成されているのか、そのしくみを明らかにした上で、それを基に典型集落・野尻の居住域構成の原理を類推することとする^{注14)}。典型集落ではない苅原を取上げる理由は、野尻と同様、屋敷図によって明治期の家屋敷の状況がわかるだけでなく、苅原の半苅の部分伊勢村の枝郷で新しく集落が形成されたところ^{注15)}であり、戸数も少なく、もともとは農地であったところが居住域になっていった様子が伺え、空間形成の基本的な姿をとらえやすく、居住域を構成する基本単位を考察するのに適しているからである。

調査方法は、野尻、苅原とも屋敷図の転記図面をもとに戸別聞き取り調査により明治期の屋敷図を確認するとともに、現住宅平面(増改築の状況を含む)、屋敷配置、前住宅平面等、居住空間の変遷についてヒアリング及びプラン調査を行った。野尻については、さらに集落空間全般についてのヒアリングと実測を行った。調査時期は2000年10月～12月である^{注16)}。なお対象および関連する集落(野尻、苅原、伊勢)及び他の典型集落(大橋、北中小路、霊仙寺、小平井、十里、阿)の位置は図1のとおりである(図には、6町四方の条里の基準線^{注17)}を加筆している)。

図1 対象、関連集落、及び他の典型集落の位置図 1/100,000

3. 典型集落・野尻の集落空間および家屋敷の特性

野尻集落は、栗東市の北端、守山市境に位置する。全域平坦な地で古代から農地として開発され、米麦中心の農業が営まれてきた。近世の村高は、438石余りで、近世を通じて明治元年まで変化していない^{注18)}ことから、明治初期と同等の農業生産力、つまり生産基盤や生産体制が近世初期には備わっていたことが読み取れる。^{注19)}明治期の状況は、明治11年の資料^{注20)}で、戸数42戸、人口204人。土地は反別35町6反2畝16歩、田地31町9反4畝11歩、畑地5反1畝25歩、宅地2町5畝26歩、雑地4反8畝23歩(草生あるいは寺地等)、除税地6反1畝21歩。牛馬21頭。荷車8両。水車2ヶ所となっている。

次に、屋敷図の例を図2に示す。屋敷図には屋敷番号と小字名・地番、地所持ち主、家屋持ち主、単線で描かれた「住家」^{注21)}、「小家」^{注22)}、「土蔵」^{注23)}、「厩」^{注24)}等の棟ごとの名称と規模、座敷構成、屋根の葺き方、方位が表記されている。その他、座敷に(宿舎)、備考として畳数と家族人数が、朱書きで加筆されている。このような屋敷図が作成された理由について、苅原での調査より、「軍隊が野洲川周辺で演習を行っており、民家に軍人さんをよく泊めて、子どもはどうして何人泊めたか自慢していた」と確認しており、明治大正期に大津に営所があった歩兵第九連隊などの訓練時に宿泊場所を確保するため、各村に人数を割り当て、宿舎として集落の各屋敷配置と宿泊可能畳数を把握する必要があったためと考えられる。

屋敷図には住家の入口は表記されていないが、四つ間取りの表側、普段、家族が就寝に使わないザシキ、デイの間に(宿舎)と朱書きされており、(宿舎)の表記がある座敷側が平入の表(入口)側であることがわかる^{注22)}。屋敷図の屋敷番号は48番まで(26番が欠番)で、現地調査については、明治期と同じ地番のところに現在、建物があるが調査できなかったもの〔未調査〕6件、その場所に建物がなく調査できないもの〔調査不能〕6件を除き35件の調査を行った。

調査結果を基に、野尻の明治中期の集落図を作成する。活用した資料、方法は次の①～④のとおりである。

①地形図(最も古い1/2,500地図(S46年))を拡大した1/1,000地図をベースマップにする。②野尻村地籍全図^{注23)}と照合しながら各地番・敷地に屋敷図を配置する。③栗太郡野尻村地籍全図^{注24)}より土地利用区分を示す。④航空写真^{注25)}や現地調査資料と照合・確認する。建物配置の方位は、屋敷図に記された方位を基に現地調査による修正を加え、さらに航空写真と照合し、建物の軸線の振れ具合のばらつきが少ないことから、全体的に調整を行った^{注26)}。以上

図2 屋敷図の例 N-42 1/500

図3 明治中期の野尻の集落図 1/2,500

表1 野尻の屋敷図調査一覧

屋敷 番号	調査 状況 ※注1	道路 アクセス 方位 ※注2	形式※注4	(宿舎) 表記 ※注2	規模 (間)×(間)	面積 (坪)	棟の 軸方向	入口位置 ※注2	座敷位置	付属家 ※注2	その他 構成	水路※注8 メイン 位置 ※注2
1	○	北	四つ間	○	4×6	24	南北	東	南	並行	水車小屋・厩	北
2	○	南	二つ間(横)	○	2×2.5	5	南北	#	東	—	—	—
3	○	南	二つ間	○	2×3.5	7	南北	#	北	—	—	—
4	○	南	四つ間	○	3.5×5.5	19.25	東西	南	東	直行	—	—
5	○	南	四つ間	○	3×5	15	東西	南	東	—	—	—
6	○	東	二つ間	○	2×3	6	南北	#	北	—	—	—
7	○	西	二つ間(縦)	○	2×4.5	9	南北	東 ※注6	南	—	—	—
8	○	西	二つ間	○	2×2.5	5	南北	#	北	—	—	—
9	○	西	二つ間	○	2×3	6	東西	#	東	並行	—	—
10	○	東	二つ間	○	2×3	6	東西	南 ※注6	東	—	—	—
11	○	南	二つ間(縦)	○	2×4.5	9	南北	東 ※注7	南	—	—	—
12	○	北	二つ間(横)	○	3×3.5	10.5	南北	東 ※注7	北	—	—	—
13	○	北	二つ間(縦)	○	2×4 ※注5	8	南北	東 ※注6	北	—	—	—
14	○	西	六つ間	○	4×8	32	南北	東 ※注6	北	並行	土蔵・門・厩	北
15	○	西	四つ間	○	4.5×7	31.5	東西	南	東	直行	土蔵・門・厩	北
16	○	南	四つ間	○	3.5×6.5	22.75	南北	東	北	直行	土蔵・物入・厩	#
17	○	東	二つ間	○	2×3.5	7	東西	南 ※注7	西	直列(接続)	物入・厩	南
18	○	東	四つ間	○	3×6	18	東西	南	西	直列(接続)	物入・厩	—
19	○	南	四つ間	○	3.5×6.5	22.75	南北	東	北	(別敷地)	物入・厩	南
20	○	北 ※注3	四つ間	○	4×6	24	南北	東	南	並行・ (別敷地)	土蔵・小舎	南
21	○	東	四つ間	○	4×7.5	30	南北	東	北	直行	小舎・物入・厩	西
22	×	東	二つ間(縦)	○	2×5	10	南北	東 ※注7	北	—	物入	西
23	×	東	四つ間+1	○	3.5×6+2	23	東西	南	西	—	—	西
24	○	東	四つ間	○	4×7	28	南北	東	南	並行	ハナレ・ 物入・門・厩	北
25	○	南	四つ間+1	—	3.5×6.5+4.5	27.25	南北	東 ※注7	北	並行	土蔵・厩	—
27	○	北	四つ間	○	4×6	24	南北	東	北	並行	ハナレ・土蔵・門・ (物入(別敷地))	東 ※注7
28	○	南	四つ間	○	4×6	24	南北	東	北	—	—	東
29	○	西	四つ間	○	3.5×6.5	22.75	東西	南	東	直列(接続)	ハナレ	北
30	×	西	二つ間	○	2×5.5	11	東西	南 ※注7	東	—	—	北
31	○	北	四つ間	○	3×4.5	13.5	南北	北	東	—	—	—
32	○	北	二つ間	○	2×3	6	南北	#	南	—	—	—
33	○	西	二つ間	○	2×3.5	7	東西	南 ※注7	東	—	—	—
34	○	北 ※注3	二つ間	○	3.5×6	21	東西	南 ※注7	南	直行	ハナレ	北
35	×	南	二つ間	○	2.5×4.5	11.25	南北	東 ※注7	南	並行	ハナレ	南
36	○	北 ※注3	四つ間	○	4×7	28	南北	東	北	並行	土蔵・厩	南
37	○	東	四つ間	○	4×6	24	南北	東	北	直列(接続)	土蔵・厩	南
38	○	南	四つ間	○	3.5×6	21	南北	東	南	直行	—	北
39	○	北	二つ間(縦)	○	2×6 ※注5	12	南北	東 ※注7	北	—	—	—
40	○	#	二つ間	○	2×3 ※注5	6	南北	#	北	—	—	—
41	○	東	二つ間(縦)	○	2×5	10	南北	東 ※注7	南	直列	—	北
42	○	北	四つ間	○	4×7	28	南北	東	北	並行	物入・井戸・厩	南
43	○	北	四つ間	○	3×5	15	東西	南	西	直行	物入・厩	南
44	○	南	四つ間	○	3×6	18	東西	南	西	直行	土蔵・厩	北
45	×	東 ※注3	四つ間(増築)	○	3.5×6	21	南北	東	北	並行	—	#
46	○	西	四つ間	○	4×7	28	東西	南	東	並行	—	北
47	×	東	二つ間(横)	—	2.5×5	12.5	南北	東 ※注7	北	—	—	—
48	○	南	四つ間	○	3.5×6	21	東西	南	東	直列	小舎・ 物入・ハナレ・厩	西

より作成した集落図を図3に示す注27)。

図には、道路から敷地へのアクセス方位注28)と、各屋敷の住家の入口位置注29)も記入している。集落図で示した家屋敷の情報と道路、敷地、水路との関係を整理すると表1のとおりである。まず各屋敷の住家タイプについて、一つ間11、二つ間(縦)6、(横)3、四つ間26、六つ間1と、四つ間が最も多いが、一つ間、二つ間を合わせると4割を超え、比較的小さな規模の住家も多い。四つ間については、梁間3間の

もの5、3.5間10、4間10、4.5間1で、3.5間、4間が多く、桁行が6間のものが12と最も多く、面積で21~24坪が標準的な大きさとなっている。

次に住家の棟の軸方向と敷地アクセス方位、住家の入口位置の関係をみる(表2)。なお、本文中や図表における方位の表現は、絶対方位ではなく、条里地割により集落の軸線が真北より33°東に傾いており、条里地割の軸線を基準にした東・西・南・北を示している。棟の軸方向は、「東西」17「南北」30である。それらの集落図における立地状況は、中央の南北道路より東側エリアでは18のうち、それぞれ半々で、西側エリアでは29のうち「東西」8、「南北」21と、住戸密度の高い西側では「南北」が7割以上と多くなっている。「東西」については、東側では、棟の軸と同方向・東から西にメインの道路・水路が走るそれらに接する両端

※注1 ○:現地調査実施
—:調査不能(現在その場所に建物がなく、変化をとらえられないもの)
×:未調査(調査できなかったもの)

※注2 #:不明 —:該当なし
※注3 2方向よりアクセスがある中でメインの方向
※注4 二つ間は土間との関係で、土間に沿って部屋を配置するのが(横)、前土間として奥に並べるのが(縦)。

※注5 一部寸法が記載されていない、あるいは誤りと思われるため、屋敷図より推定。

※注6 現地ヒアリングで確認。

※注7 敷地と建物配置、平面図より推定。

※注8 簡易な溝等の排水路は含まない。

の敷地で5、西側では居住域の北端部で比較的多くみられる。

住家の入口位置は、棟の軸方向が「東西」では不明と北入1例を除いて、全て南入(15)であり、「南北」では不明を除いて全て東入(24)である。敷地へのアクセスについては、「東西」の場合、西が7と最も多く、南、北、東が3~4と同程度である。一方「南北」の場合、敷地へのアクセスは西が2と少なく、他は8~10と同程度である。以上、住家の棟の軸方向ごとに敷地アクセス、入口位置の関係をまとめたのが図4である。「東西」では、住家は南入で敷地南面を広くとり、敷地へのアクセスは西が多いが、他各方向からあり、「南北」では、住家は東入で敷地東面を広くとり、アクセスは西が少ない以外、東、南、北どの方向からも多い。

次に住家と付属家の関係をみる。付属家では、住家が「四つ間」以上タイプにおいては小家がほとんどにみられるため、住家に対する小家の配置の仕方に着目して、屋敷構えの形態を把握する。表3より小家は27例見られる。配置の仕方は、住家の軸方向と直角方向、L字になる「直行」型、住家の軸方向と向き合い、間にオープンスペースをとる「並行」型、住家の軸方向と同方向で、住家に連なる(接続するものを含む)「直列」型に分類される。この中で、「並行」型は11と最も多く、次いで「直行」型9、「直列」型6となっている。これを住家の棟の軸方向との関係でみると特色が明らかで、「並行」型は、住家の軸が「南北」方向で9と最も多く見られる。「直行」型は、「南北」方向でも4例見られるが、「東西」方向が5例とやや多くなっている。「直列」型は、「東西」方向が4で、南北方向に敷地に余裕がない「南北」の場合2と少なくなっている。小家以外の付属家では、一部、庄屋クラスの家屋敷で土蔵、門が配置され、囲み型の屋敷構えをとっている(図3 No14、27)。

次に、住家の棟の軸方向と住家の入口、座敷配置、メイン水路の位置関係をみたのが表4である。住家の軸方向が「東西」のものは、

表4 住家の軸方向と入口、座敷配置、水路位置

住家の棟の軸方向	住家入口	座敷配置	メイン水路の位置					
			東	西	南	北	無	不明
東西	南	15	東10 西5	—	1	—	5	4
	北	1	東1 西—	—	—	—	—	1
	不明	1	東1	—	—	—	—	1
	合計	17	17	0	2	2	6	7
南北	東	24	北15 南9	—	—	2	5	2
	不明	6	東1 北—	—	—	—	—	1
	合計	30	30	1	3	10	7	7

入口が南で、座敷が東、土間が西のとなる住戸が10と最も多い。このタイプは、水まわりが水の流れの下手に位置しメイン水路も北が半数を占めている。一方、「南北」のものでは、入口が東で、座敷が北、土間が南となるタイプが15と最も多く、メイン水路が南ないしは西で合計10と、2/3を占めている。逆に、座敷が南で土間が北となるタイプが9あり、それらはメイン水路が北のものが5となっている。いずれも、水路に近い方向に土間を配する傾向が強いことから、水路の位置が、住家の座敷と土間の配置を決める大きな要因になっていることが理解できる。

以上、「東西」と「南北」の住家配置に着目して、立地場所(敷地条件)や住家入口と道路アクセスの方位、小家配置の仕方、住家の座敷や土間のとり方と水路の位置関係をみてきた。「東西」配置は東側エリアで同方向に走るメインの道路・水路に接する両端の敷地や西側エリア居住域の北端境界部で多くみられ、住家入口は南入で、敷地南面を広くとって、小家配置は「直行」型あるいは「直列」型とし、道路は西からが多いが他どの方向からもアクセスでき、水路は敷地の北側が多い。「南北」配置は、住戸密度が高い西側エリアに多く、住家入口は東入で、敷地東面を広くとって、小家配置を「平行」型あるいは「直行」型とし、道路は南、北、東から入るパターンが多く、水路は南側が最も多いが、北側、西側もあり、水路位置に対してより柔軟に住家の配置ができるタイプとなっている。

4. 荻原の集落空間および家屋敷の特性と空間構成

荻原集落^{注30)}は半荻村と市川原村が合併して形成され、二つの居住域からなる。屋敷図の屋敷番号は26番まであり^{注31)}、現地調査は全体にわたって行ったが、ここでは、伊勢村の枝郷として比較的新しく集落が形成されたと推測される半荻をみていく^{注32)}。現地調査は13番までのうち3件を行った。

図5は野尻集落と同様の資料^{注33)}、方法で作成した明治中期の集落図である。また、集落図で示した家屋敷の情報と道路、敷地、水路との関係を整理したのが表5である。各屋敷の住家タイプは、二つ間(縦)1、二つ間(横)1、三つ間2、四つ間8、七つ間1と6割以上が四つ間である。四つ間の規模は、梁間3間のもの2、3.5間2、4間3、5.5間1となっており、桁行は7間が3と最も多く、面積では、21~28坪に多く分布している。住家の棟の軸方向については、「東西」7、「南北」6と、野尻に比べ「東西」配置が多くなっている。これは、戸数が少なく、敷地条件の制約も比較的小さいためだと考えられる。集落内での「東西」の立地状況は、敷地アクセス方位との関係では、全て北からアクセスとなる字南代(中の井川より南側)で、4例のうち3例が「東西」方向である。また、北側の字四

表2 敷地アクセスと住家の軸方向、入口位置

敷地へのアクセス方位	住家の棟の軸方向					
	東西			南北		
	合計	住家入口	北	合計	住家入口	不明
東	12	3	—	9	8	1
西	9	7	6	—	2	1
南	14	4	4	—	10	8
北	11	3	2	1	—	8
不明	1	—	—	—	1	—
合計	47	17	15	1	30	24

図4 住家の軸方向と敷地アクセス、入口位置

表3 住家に対する小家の配置

住家の棟の軸方向	住家に対する小家配置				
	直行	並行	直列	その他	合計
東西	5	2	4	—	6
南北	4	9	2	1	14
合計	9	11	6	1	20

図5 明治中期の荻原（半荻）の集落図 1/2,500

反町では、居住域の北端部において、「東西」方向が多くなっており、野尻集落の傾向とも一致している。

屋敷配置について、住家に対する小家配置をみると（表6）、住家の棟の軸方向が「東西」配置では、直行型が多く次いで直列型。「南北」配置では並行型と直行型が半々で、野尻に比べ直行型が多くなっている。住家の配置と間取り、水路との関係については、表7より、住家が「東西」配置で、座敷が東で土間が水の流れの下手側の西が7例中5例と最も多く、水路の位置も不明を除き全てが北側となっている。また、「南北」配置では、座敷が北で土間が水の流れの下手側の南となるのが6例中4例ある。水路位置については、サンプル数が少ないが、東、西、北が同数あり、「東西」に比べ分散している。

次に、集落居住域の空間構成と条里地割の関係を半荻の集落図をもとに検討する。図6は、半荻の集落図に条里地割のラインを描いたものである。条里の基本単位である1町×1町（1町歩）の「坪」区画を東西方向に2等分し、水路、道路、畦畔等で区画された30間×60間のエリア（図6、グレーで色分けした部分と色分けしていない部分を交互に並べている）を「基本ブロック」と呼ぶことにすると、中の井川より北側の宇四反町の居住域は、二つの基本ブロックで構成されていることがわかる。基本ブロックは、南北方向に5

表5 荻原（半荻）の屋敷図調査一覧

屋敷番号	調査状況 ※注1	道路		住家(母屋)						付属家		水路※注4
		アクセス方位	形式	(宿舎)表記 ※注2	規模 (間)×(間)	面積 (坪)	棟の軸方向	入口位置	座敷位置	小家配置	その他構成	
1	×	南	七つ間	○	5×9.5	41.5	南北	東	北	直行	物入・厩	北
2	×	北	二つ間(縦)	—	2×6	12	東西	南 ※注3	東	直行	厩	—
3	×	北	二つ間(横)	○	3×6	18	南北	東	南	直行	厩	西
4	×	南	三つ間	○	3×6.5	19.5	東西	南	西	直列	厩	北
5	○	西	四つ間	○	3×7	21	東西	南	東	直行	土蔵・厩	北
6	×	東	四つ間	○	4×7	28	東西	南	東	直行	土蔵・厩	北・西
7	○	西	四つ間	○	3.5×6	21	南北	東	北	並行	ハナレ・厩	東
8	×	西	四つ間	○	3×5.5	16.5	南北	東	北	並行	厩	東
9	×	東	四つ間	○	4×6.5	26	南北	東	北	直行	物入・門・厩・物入・ハナレ	西
10	○	北	三つ間	—	3.5×6.5	22.75	東西	北	東	直行	土蔵・ハナレ・厩	北
11	×	北	四つ間	○	4×7	28	南北	西	南	並行	厩	北
12	×	北	四つ間	○	3.5×6.5	22.75	東西	北	東	直行	厩	北
13	×	北	四つ間	○	5.5×8	44	東西	北	西	直列	小家・厩	北

※注1 ○現地調査実施 ×未調査(調査できなかったもの)
 ※注2 —:該当なし
 ※注3 敷地と建物配置、平面図より推定。
 ※注4 簡易な溝等の排水路は含まない。

等分した、30間×12間の長方形（半折型^{注34)}）の農地（水田）の耕地割を踏襲し、さらに長辺を2等分した15間×12間（180歩）の土地が、宅地割の基本単位となっている^{注35)}。なお、図7は荻原（半荻）の居住域とその周辺の地割の状況をみたものであるが、周辺の圃場域には半折型の条里地割だけでなく、長地型の条里地割が多く見られるのに対して、居住域においては、基本ブロックを形成する半折型の条里地割が卓越していることがわかる。

表6 住家に対する小家配置

住家の棟の軸方向	住家に対する小家配置			
	直行	並行	直列	合計
東西	5	—	2	7
南北	3	3	—	6
合計	8	3	2	13

表7 住家の軸方向と入口、座敷配置、水路位置

住家の棟の軸方向	住家入口	座敷配置	メイン水路の位置					
			東	西	南	北	無	不明
東西	南	東	3	—	—	—	1	1
		西	1	—	—	—	1	—
	北	東	2	—	—	—	2	—
南北	東	東	1	—	1	—	—	—
		北	4	2	1	—	1	—
	西	南	1	—	—	—	1	—
合計	13	13	2	2	0	7	1	1

図6 荻原（半荻）の空間構成と条里地割 1/5,000

図7 周辺圃場域も含めた荻原（半荻）の地割の状況

5. 典型集落・野尻の集落居住域の空間構造

条里地割を踏まえたシンプルな集落形態をとっている荻原(半荻)の空間構成の手法を援用し、典型集落・野尻の集落居住域の空間構造の解明を試みる。

図8は野尻の集落空間を形づくる主要要素を抽出し、それらが重なり合って空間が構成される様子を順に示している。

- ① 図8-1により、集落を南北の貫く幹線道路より西側のエリアは、南北2町余り、東西1町の大きさで、条里地割をベースとして4つの基本ブロックによって構成される^{注36)}。基本ブロックの大きさは1町/2×1町で、さらに長辺方向を5等分した(60間/2=30間)×(60間/5=12間)=360歩(1反)の長方形の耕地割を下地として内包している。
- ② 同じく図8-1により、基本ブロックの両端(長辺方向)にうまく水路が配されるよう計画されている。すなわち、居住域の北の境界を形成する第一水路から中の井川まで5つの水路があり、第2水路、第3水路は基本ブロックの長辺とラインが一致する。第4水路については、ブロックを通過する始点は短辺内にある(第3水路との間隔が30間より狭い)が、終点は、ブロックのほぼ短辺端を通過する^{注37)}。
- ③ 図8-2は、骨格道路^{注38)}と各家屋敷とつなぐアクセス道路の導入の仕方を示している。基本ブロックは骨格道路によって連結し、各ブロックには内部にアクセス道路が導入され、短辺が長辺方向にちょうど2等分されると、宅地の基本単位は、30間/2×12間=180歩となる。
- ④ 図8-3は、居住域を南北の軸方向に分割する分割道路^{注39)}が導入されていることを示しており、2本の南北の道路によって、居住域が大きく3分割されている^{注40)}。これにより集落中心部をとり囲むように道路が配置されるとともに、規模の大きな敷地を確保することが可能となり、中心部にお寺が設置されている。また、居住域北端部では、分割道路が北側境界部の規模の大きな宅地へのアクセス道路として機能している。

続いて、このような主要要素を組み合わせる方法によって形成される敷地・ブロックと屋敷配置の関係を確認しながら、個々の家屋敷のつながりがどのように構造化され、全体を形成しているのかをみていく。既に家屋敷の特性分析において、道路アクセスを含めた敷地形態や水路の位置によって、住家の方向や間取りの取り方、小家の配置の仕方等を含む屋敷配置が一定決まってくることをみてきた。たとえば、図8-1の南から2つめの基本ブロックに対応する家屋敷の配置を図3でみると、No.37~No.45の9つの屋敷がほぼ基本的な宅地割に対応して立地している。住家方向が「南北」が7と多数を占め、基本ブロック両端の水路に対して、アクセス道路より南では土間が南側に、北では北側に寄って配置されるものが多く、水路を利用しやすい屋敷配置となっている。そして、敷地単位では同様の配置パターンをもつ家屋敷が連続してつながっていく居住域の構造になっている。また、居住域の西端部では5つの屋敷のうち「南北」の住家方向のものが4つを占め、それらはいずれも敷地西側に沿って住家が位置し、東および南からアクセスし、西に閉じ東に開かれた屋敷配置となっている。このような規則性を持った家屋敷が連続してつながることで、居住域全体として西に閉じ、東に開いた空間を形成することになっている。居住域の北端部についても同様、北

8-1 条里地割と基本ブロックの導入

8-2 骨格道路とアクセス道路の導入

8-3 分割道路の導入

図8 野尻の集落空間を形づくる主要要素の抽出 1/5,000

に閉じ、南に開いた空間を形成することになっている。ちなみに、家屋敷の数が少ない荻原(半荻)でも、居住域北端部で「東西」の住戸がつながることで、集落全体として南に開かれた形になっている。

以上を踏まえて図9は、野尻の居住域外周部において規則的な屋敷配置が連続している様子を概念図として示したものである。基本ブロックの両端長辺方向に水路が配され、さらに短辺を2等分して長辺方向に導入されるアクセス道路によって、12間×15間(180歩)を基本単位とする敷地が形成される。個々の敷地は、居住域北端部以外では、「南北」配置の住家が多く、水路に近い方向に土間が

図9 野尻の居住域外周部における屋敷配置の連続性

配置される傾向が強く、住家の入口は東で、敷地東面を広くとって、道路は北、東、南から入るパターンが多い。＜敷地アクセス+庭（農作業スペースでもある）+家屋敷（住家+小家等）+水路＞で構成される規則性を持った屋敷配置がひとつの単位ユニットとなって、基本ブロックのような個が連続してつながるしくみを持つことで、集落全体として、統一性のある空間を形づくっている。

6. まとめ

本稿では典型集落・野尻の明治期の姿を再現し、家屋敷の特性を分析するとともに条里地割を踏まえた基本ブロックの考え方を導入し、集落居住域の構成原理を検討した。その結果、以下の知見が得られた。

- ① 家屋敷を構成する要素は、「住家」、「小家」、「土蔵」、「物入」、「ハナレ」、「厩」等があり、住宅規模の大きい「四つ間」以上のタイプでは「小家」がほとんどで見られる。
- ② 住家は、棟の軸方向が「東西」17、「南北」30で、「南北」が6割以上を占める。住家の入口は「東西」では南入、「南北」では東入が一般的で、ともに住家の敷地正面を広くとる屋敷配置の仕方は共通している。
- ③ 主家に対する小家の配置の仕方は、住家の棟の軸方向と直角方向、L字になる「直行」型、並行して向き合う「並行」型、同方向で住家に連なる（接続するものを含む）「直列」型に分類される。それらに応じて敷地オープンスペース（庭）のとり方も決まってくる。主家の軸方向との関係では、「南北」は平行型、「東西」は直行型、直列形が多くなっている。
- ④ 居住域全体の中での立地状況は、住戸密度の高い西側エリアで「南北」の住家の割合が高く、「東西」は東側エリアの東西方向のメイン道路・水路の両端や西側エリアでは北端部に多い。
- ⑤ 住家の方向や間取りの取り方（玄関、座敷、土間の位置）、小家の配置の仕方等を含む屋敷配置は道路アクセスを含めた敷地形態と水路との関係によって決まってくる。特に水路の位置が住家の間取り配置を決める大きな要因となっており、「南北」配置は、水路位置に対して、より柔軟な対応ができるタイプとなっている。
- ⑥ 最もシンプルな形態をとどめ、集落形成の初期段階の姿を反映していると思われる荻原（半荻）の空間構成を検討した結果、集

落居住域が、条里地割をベースとした1/2町×1町の基本ブロックにより構成されていることが示された。その内部には、さらに長辺を5等分した30間×12間＝360歩（1反）の長方形の耕地割を有している。

- ⑦ 基本ブロックのモデル的な形は、両端長辺方向に水路を配し、ブロック内部へ短辺を分割するアクセス道路を導入することで、15間（30間/2）×12間＝180歩の基本的な宅地割が得られるものとなっている。
- ⑧ 野尻では、このような基本ブロックが居住域を形成する骨格となる道路によって連結し、いくつか組み合わせることで全体の枠組みが形づくられている。一方、基本ブロックの水路の流下方向と直行する軸方向（南北）に西側エリアの居住域（東西1町）を3分割する道路が導入され、中心部をとり囲むよう道路が整備されている。これにより、パリエーションに富むブロック割や宅地割がなされ、基本の宅地割より広い敷地を有する公共空間・お寺を中心部に配し、中心性を形づくっている。

なお、東側エリアも含めた居住域全体の空間がどう形づくられているかについては、今後の検討課題として残されている。

- ⑨ 敷地アクセスや水路との関係により定まった敷地単位で同様の配置パターンを持つ家屋敷が連続してつながる居住域の構造となっており、基本ブロックのような個が連続してつながるしくみを持つことで、集落全体として統一感のある空間が生まれることにつながっている。

謝辞

調査にあたり、野尻集落、荻原集落の区長さんはじめ住民のみなさんには多大なるご協力をいただきました。また、栗東歴史民俗博物館の学芸員の方々、調査実施と結果のとりまとめを共同で行った福井大学玉置研究室30期生の秋山文子さん他、研究室の方々には大変お世話になりました。記して感謝の意を表わします。

注

- 注1) 文献1)
- 注2) 道路及び水路により分割・区画された複数の地番で構成する土地割り。
- 注3) 本稿では空間的な側面に絞って、どのような秩序によって家屋敷が立地していくのか、その枠組みや方向性を決める要因を明らかにすることに力点を置いている。集住のしくみの解明には、このような空間的な側面だけでなく、社会集団や共同性の単位など、多面的なアプローチが求められるが、それらについては今後の課題である。
- 注4) 文献2)
- 注5) 文献3)～5)
- 注6) 文献6)、7)
- 注7) 条里地割が卓越した地域において、工学的、計画学的立場から集落の空間形成の解明を行っているものとして文献8)があるが、居住域レベルまでは対象としていない。
- 注8) 文献9)、10)など
- 注9) 文献11)
- 注10) 文献13)
- 注11) 文献1)において、大橋、野尻、北中小路、霊仙寺、小平井、十里、阿、伊勢を選定した。それらの位置を後掲、図1に示す。
- 注12) 文献14)において、筆者らは、明治初期における平地集落の典型的な姿を明らかにしており、規模は30～40町歩で、約600m四方、屋敷を中心とする居住域が2町歩弱四方、戸数40戸前後である。
- 注13) 栗東歴史民俗博物館所蔵「野尻村屋敷図」。他、旧大宝村内において、「笠川村屋敷図」、「荻原村屋敷図」が存在する。
- 注14) 規模の小さな集落の基本構造をみることに積極的な意味があると考

えたのは、文献 2)pp.66 において、地井昭夫氏が、モデルが時間をどう取り込んでいくのかに関連して、「あるモデルや類型がどのような条件によって発展、変化するかという仕組み（構造的）が明らかにされなければ、計画にとってあまり有効でない」と述べていることにヒントを得ている。

注 15) 文献 17) より、半苧（苧原）は「元禄郷帳」には伊勢村枝郷半苧村と記載され、現守山市伊勢町から分村した村である。半苧村は明治まで独立村であったが、明治 7 年 (1874) に市川原村と合併して苧原村となった。

注 16) 文献 15)、16) において、調査結果の概要報告を行っている。

注 17) 条里地割の大枠の耕地割は、耕地を 6 町四方の碁盤目にわり、南北につらなる 6 町幅の耕地帯を里、東西につらなるものを条と名づけている。

注 18) 文献 12) より。

注 19) 居住域の空間形成は中世後期に進展し、近世初めには明治初期の形が整えられていたものと推測される。その根拠として、神社とお寺の成立状況があげられる。日吉神社では、「十人衆」という宮座の存在が確認できる。宮座は神社の経営と祭礼を遂行するための祭祀組織で、中世の惣村形成の中心的役割を果たした。日吉神社の鎮座年代は不明であるが、史料によれば、正安 3 年 (1301) の厨子銘を最古とし、その後、寛永 9 年 (1632) に領主の稲垣摂津の守が神供料として田地二反を寄進したとある（文献 18）。村のお堂・観音堂には区有文書が保管されており、「おとな」が寄合をしたと伝えられていることから、この小堂が中世の惣堂であったことが推測できる。また、安楽寺は、永禄 2 年 (1559) 浄土真宗本願寺派として開基。その後、慶安 2 年 (1649) 木佛を安置し、寺号公称を許され、さらに 80 年後の享保 15 年 (1730)、喚鐘を許されたことあり（文献 18）、中世末から近世にかけて、仏教・浄土真宗が普及していった様子がわかる。

注 20) 文献 19) より。

注 21) 主屋、母屋という言い方もされるが、本稿では屋敷図に示されている「住家」という表現を用いている。「小家」も同様。

注 22) 二間、小家の場合でも日常的に使われていないところは（宿舎）と朱書きされている。

注 23) 栗東歴史民俗博物館所蔵。一筆ごとの区画が示しており、現在と同じ地番がふられていることから、地籍図が整備されることになった明治 22 年以降のものであり、他地区の同種図面から明治中期のものと推定される。

注 24) 文献 18) に収録。戸長の印があり、明治 11～21 年であることは確か。「地籍編製土地調査手続」の様式であることから明治 17 年頃と推定される。土地利用の状況は、明治期の最初の絵図・地券取り調べ総絵図（明治 6 年）から変化している。

注 25) 昭和 33 年時点。明治の村屋敷図の建物が数多く残っており、昭和 30 年代前半までは集落景観がそれほど変わっていないことが確認できる。

注 26) 軸線が真北より東へ 33° 傾く。

注 27) 道路については、集落の中央を南北に貫く道路と、それに東から交わる道路が拡幅されているが、その幅員を補正した復元は行っていない。

注 28) 2 方向よりアクセスが可能な場合は、メインの方向。

注 29) 一つ間、二つ間については、現地ヒアリングでの確認したものと敷地と建物配置、平面図より推定したものと、不明がある。

注 30) 文献 19) より、明治 11 年のデータで、戸数 24 戸、人口 115 人。土地は反別 18 町 8 反 5 畝 25 歩、田地 16 町 7 反 1 畝 2 歩、畑地 3 反 3 畝 20 歩、宅地 1 町 4 反 8 畝 25 歩、雑地 2 反 3 畝 21 歩（敷地草生等）、除税地 8 畝 17 歩。牛馬 11 頭。荷車 9 両となっている。

注 31) 他、神社、お寺を除いて、半苧で番号なしが 1 件ある。

注 32) 文献 12) より、近世を通した伊勢村の石高の推移は、慶安年間 (1648～1651) まで 819.365 で、元禄年間 (1688～1703) に 582.054 に減じ、同時に半苧 209.998 の石高はじめて出現し、以降、明治元年まで両者は変化していないことから、この間に半苧が伊勢村から分村していることがわかる。しかし、半苧の開発がいつ頃から進められたかについては、史料がないため不明。伊勢村本郷については、文献 20) より、村のお寺・永願寺が文明 3 年 (1471)、伊勢三郎勝永入道により開基（当初より浄土真宗、本堂創建は寛永 14 年 (1637)）とあり、それ以前に集村としての伊勢村の集落の形が整っていたのではないかと推測される。枝村である半苧の集落形成は、それ以降、中世室町期～近世初期にかけてと考えられる。

注 33) 地籍図等の参照資料は、苧原村地券取調総絵図（明治 6 年 2 月）、苧原水路図（年代不詳。他地区の同種図面より大正期と推定される）。いずれも栗東歴史民俗博物館所蔵。

注 34) 条里地割りの基本単位である 1 町歩の「坪」区画の 1 辺を十等分し、隣の辺に平行に畦をつくった 6 間×60 間の長方形のものを長地型と呼ぶのに対して、半折型は 12 間×30 間の長方形に割ったもの。

注 35) 図 5、字四反町の東側の基本ブロックの宅地割参照。西側ブロックは

中央に道路を通して 2 分割している。長辺方向はややイレギュラーな 5 分割となっているため、宅地面積は基本的な宅地割よりやや広がっている。

注 36) 居住域の南東端は中の井川と南北の骨格道路の交点となっている。家屋敷が集まっているのは、それより 1/2 町、北側からである。

注 37) 第 5 水路については、家屋敷が集中するブロックでないため、計画的な制約を受けないため、ブロック内を通過している。それでも、終点は、短辺のほぼ中央部（30 間/2 の水路間隔）を通過している。

注 38) 骨格道路は、集落居住域の形や骨組みを形づくる骨格となる道路という意味で用いている。形態面だけでなく、居住域と外とつなぐ機能面での重要度が高い道路も骨格道路としている。さらに、内部の各屋敷と連絡する道路をアクセス道路としている。前稿で、道の分類を、居住域内については、中筋道とか呼ばれる村の主要道で村の中を大きく区切る役割を果たしている道、宅地のブロック割を形成する細街路としての道としていたが、より機能や形態を重視した表現を用いることとした。

注 39) 分割道路は、居住域を条里地割の南北軸方向に大きく分ける道路という意味で用いている。野尻では、基本ブロックの長辺方向に水路が配されているので、水の流れる方向と直交する方向になる。

注 40) 文献 1) において、水路による居住域内部の分割の仕方を取り上げ、他の典型集落の大橋と十里、阿村の南半分では 1 町を 2 分割する水路割が、北中小路では 3 分割する水路割りが導入されていることをみている。

参考文献

- 1) 秦憲志，桜井康宏：近江平野野洲川下流域条里地割における用水系統と集落居住域形成 ―近江平野野洲川下流域における条里地割と平地集落の空間形成に関する研究― その 1 ―，日本建築学会計画系論文集，No.659，pp.43-51，2011.1
- 2) 日本建築学会農村計画委員会集落計画小委員会：図説集落その空間と計画，都市文化社，1989
- 3) 黒野弘靖，菊地成朋：村落と屋敷の対応関係からみた散村の構成原理―砺波散居村における居住特性の分析― その 2 ―，日本建築学会計画系論文集，No.507，pp.151-155，1998.5
- 4) 黒野弘靖，菊地成朋：列状村の集落空間とその水系・ミチへの関連―砺波散居村における居住特性の分析― その 3 ―，日本建築学会計画系論文集，No.520，pp.213-217，1999.6
- 5) 黒野弘靖，菊地成朋：街路村における街路と水路の中心性と屋敷構えとの関係―砺波散居村における居住特性の分析― その 4 ―，日本建築学会計画系論文集，No.537，pp.165-170，2000.11
- 6) 中野茂夫，藤川昌樹，安藤邦廣，後藤治，堀江淳，黒坂貴裕：つくば市の集落空間と屋敷地の構成―大村・金田村・洞下村を事例に―，日本建築学会計画系論文集，No.578，pp.139-145，2004.4
- 7) 中野茂夫，藤川昌樹，安藤邦廣，後藤治，堀江淳，黒坂貴裕：つくば市の農家における屋敷の空間構成―接道条件と外部空間に注目して―，日本建築学会計画系論文集，No.583，pp.135-141，2004.9
- 8) 山森芳郎：近江湖東平野における条理空間について ―農村空間の史的形成過程に関する研究（1）―，日本建築学会計画系論文集，No.429，pp.129-139，1991.11
- 9) 水野章二：日本中世の村落と荘園制，校倉書房，2000
- 10) 金田章裕：条里と集落の歴史地理学研究，大明堂，1985
- 11) 栗東歴史民俗博物館：テーマ展「織の歴史と文化」冊子，2001.5.26～6.24
- 12) 栗東歴史民俗博物館：企画展「村むらのすがた―近江栗太郎の村落と暮らし―」冊子，1995.9.9～10.10
- 13) 栗東町史編さん委員会：栗東の歴史 第一巻 古代・中世編，1988
- 14) 秦憲志，玉置伸吾：明治前期における滋賀県の農村集落の姿（2）―集落の空間要素とその典型規模，日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）E-2 分冊，pp.423-424，1999.9
- 15) 秦憲志，秋山文子，玉置伸吾：滋賀県湖南地域野尻集落の集落空間に関する研究―明治中期の村屋敷の状況と屋敷配置について―，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）E-2 分冊，pp.727-728，2001.9
- 16) 秋山文子，秦憲志，菊地吉信，玉置伸吾：滋賀県湖南地域野尻集落の農村住宅に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）E-2 分冊，pp.735-736，2001.9
- 17) 栗東市文化体育振興事業団：栗東の街道を歩く，2002
- 18) 野尻区：栗東野尻の歴史，1988
- 19) 滋賀県市町村沿革史編さん委員会：滋賀県市町村沿革史 第 5 巻（『滋賀県物産誌』復刻版），1962
- 20) 伊勢町自治会：伊勢町民誌，2001

（2011 年 7 月 10 日原稿受理，2012 年 2 月 7 日採用決定）